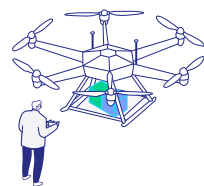




メンバー(左から)

- ① 黒瀧 浩文 エンジニアリング部 エンジニアリングソリューション課(プロジェクト統括アドバイザー)
- ② 吉田 慎吾 エンジニアリング部 生産技術課 技術開発(プロジェクトリーダー)
- ③ 板谷 琴 エンジニアリング部 エンジニアリングソリューション課(エンジニア)
- ④ 本田 昌司 エンジニアリング部 エンジニアリングソリューション課 次長



特集

未知への挑戦 純国産ドローン開発

ゼロからの挑戦

黒瀧 純国産ドローン開発のきっかけは、エンジニアリング部の執行役員からの「かつてない新しい事業をやろう」という言葉からでしたね。そこで、神奈川事業所で扱っている炭素繊維を使って、ドローンを純国産で作れないかという話が出ました。

話が進む中「国内にかつてない、大型のドローンを作る」という目標が決まったことは、大きな挑戦の第一歩でした。開発メンバーは各部署から人を募り、手探りの状態でプロジェクトが始まった形でした。

本田 プロジェクトリーダーについては、以前、EVコンセプトカー製作プロジェクトを率いたリーダーに引き続き担当してもらってはどうかとの提案もありましたが、人財育成の観点から、今回は違う人に焦点を当てました。そこで吉田さんに決まったわけですが、吉田さんはリーダーに任命された経緯を覚えてますか？

吉田 はい。担当執行役員から直接、声をかけてもらったのがきっかけです。私が炭素繊維を使った製造現場にいたことと、営業経験もあるというのも重なって、プロジェクトリーダーに抜擢されました。

黒瀧 プロジェクトリーダーになるのは初めてと聞きましたが、不安はありませんでしたか？

吉田 そうですね…。最初は「何から始めればいいのか？」という不安な状態でした。でも、上司や同僚と話がしやすい風通しの良い環境も幸いし、特に先輩方に色々相談させていただきプロジェクトを円滑に進めていくことができました。

本田 吉田さんがリーダーに決まったあと、プロジェクト統括アドバイザーとして黒瀧さんが加わりました。本社側の工場を動かす必要もありましたので、本社の担当者にも入ってもらい、

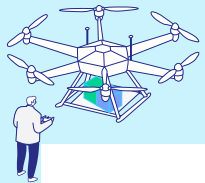
さらに各部門、生産管理、調達、製造といったメンバーで体制を固めたわけですが、吉田さんは、実際にプロジェクトを動かしてみてどうでしたか？

吉田 それぞれの分野で活躍されている方が集まり、各々の得意な部分を存分に発揮してもらうことに重点を置きながら進めた結果、一つの目標に向かう連帯感の重要性和牽引する難しさを実感することができました。

難題にぶつかっても諦めない

吉田 ドローンは会社にとって初の取り組みだったこともあり、製作にあたっては細かな情報収集が大変でした。普段の仕事では二輪や四輪のレース部品の製作に関わることで多いので、強度や軽量化といった経験を活かしながら取り組みました。しかしながら、走るよりも飛ぶために必要な「プロペラ」の知識がまったくなかったことが大きな壁でした。そこで飛翔体を研究する株式会社ドローン技術研究所の方々の知見を借りながら、短い期間の中で、全員で試行錯誤を繰り返しました。

本田 「ジャパンドローン2025」への出展が既に決まっていたので、逆算しても開発期間が5か月しかなく、みんなで手探りの状態で製作して、試験飛行場にプロペラを持ち込んでテストも行ってと、とにかく必死でしたね。初めての経験で多くのことを吸収し、成長も感じられたのではないのでしょうか。



黒瀧 テストは株式会社ドローン技術研究所の方々に教わりながら、図面を描き、部品を作って、即スタートというスピード感でした。解析ソフトや計算である程度の予測はできるんですが、実際とは異なります。飛行テストで失敗しては、その都度改良をするといった繰り返しでゴールを目指しました。現場の努力、株式会社ドローン技術研究所の方の的確なアドバイスときちんと試験ができる環境、そして運。これらの要素がうまく絡み合ったんだと思います。

本田 テストも大変でしたけど、実はほかに大きな山場もありましたよね。当初、機体の組み立ては外部の方をお願いしていましたが、組み立ての2か月ほど前に断られたため、急遽内製での対応を余儀なくされました。まったく想定していなかった事態に混乱を極めました。当社経営理念の一つ「チャレンジ



精神」の姿勢で全員が前向きに取り組みました。

吉田 私は、組み立ても内製化となった時に「できないのではないか」というより「なんかやれそうだな」と感じました。その気持ちを貫いたことが結果的に成功を導いたのかなと。できる、できない、ではなく「まずやってみよう」の風土があるトピアでだからこそ、一丸となってやり遂げられたのだと思います。

若手の挑戦と成長が循環する環境

本田 ありがたいことに「ジャパンドローン2025」での展示は予想以上に話題となりました。その際に2026年の出展にもお誘いいただけたので、次回も出展する予定です。引き続き話題を集める展示を目標に、若手の板谷さんに主担当になってもらい、着々と準備を進めています。ところで、板谷さんはプロジェクトに携わってみてどうでしたか？

板谷 私が入社1年目というのもあって、色んなことを難しく捉えて悩んでしまうことが多かったです。でも、すぐ相談できるよう上司が隣にいてくださったのもあって、だんだんと“新しいことに挑戦させてもらっている！”という感覚が大きくなり、嬉しさにつながっていきました。

本田 特に印象に残っていることはありますか？

板谷 樹脂を基材とする3Dプリンターを使うことになり、知識がなかったので上司に根掘り葉掘り聞いたのですが、実は上

司も3Dプリンターに詳しくないのが判明して、一緒になって調べたことです。それと、吉田さんや黒瀧さんも初対面からすごく話しやすく、質問や相談にも細かくしっかりと答えてくれるので、とても働きやすい環境です。皆さんベテランなうえに日々前進していっているんで、追いつくのは大変なんですけど私も頑張ります。

本田 はい。期待しています。板谷さんには展示会の準備だけでなく、多くの先輩のサポートも受けながら、金属・炭素繊維・樹脂といった、材料を選ばないマルチなモノづくりを目指して欲しいです。これからも、チャレンジしていきましょう。

板谷 色んなことを早くかららせてもらっているという実感があります。トピアで働き始めて、私は考えて行動に移していく仕事が向いていると気が付きました。経営理念の通り「チャレンジ精神」が根付いている環境だと感じています。今後も、どんなことでも、「まずはやってみよう！」の気持ちで仕事に取り組んでいきたいと思っています。

